順接から逆接へ

―助辞「とて」逆接専用化への過程―

森脇茂秀

1、はじめに

助辞「とて」に関して問題として提起される事柄は、

①引用節の承接　②語構成と成立過程

③史的、文献的偏在　④逆接専用化

があり、①②③については、中古に於ける「とて」の意味用法を明らかにすることで、既に述べたことがある（注1）。「とて」が、活用語を承ける場合、動作が顕在化していないもの、顕在化しつつあるものが多数を占めるのであるが、そこで保留した問題、即ち、

④助辞「とて」は、中世以降、逆接用法が徐々に勢力を増し、逆接専用化として用いられるようになる

ということ自体は、既に先学によって指摘されているのであるが（注2）、では、何故、逆接として専ら用いられるようになったのか、という問題に関しては不明な点が多く存しているが。中古を考察した上では、逆接用法自体は中古から存してはいたが、全体の「とて」の用例数から見れば少数であって、しかもそれは意味が形式化した「いふ」の省略形と考えられるものであった。

そこで、本稿においては、中世期に口語的要素を含んでいると考えられる、延慶本平家物語、抄物、キリシタン資料を対象とし、＜中世の「とて」の引用節の動作性＞を考察することで、逆接専用化となるプロセスの要因を明らかにしたいと思う。

2―1、延慶本平家物語中の「とて」

接続関係が、「順接から逆接へ」と変容する場合、その用法中、変容した時代に何らかの動因となったものが存在した、と想定することは、当然の理であろう。そして、変容したと考えられる中世という時代において、順接用法から逆接用法へ転じた「とて」の用法中で、最も注目されるものに「ばと

て」という語形がある。この「ばとて」形は、中世初期に逆接用法として産出し始め、後述するが、「ばって（ん）」と語形を変えてはいるが、逆接用法専用として現在方言に脈々と生き続けているのである。

「とて」についてみれば、前節で指摘したように、平安時代は主に順接用法として用いられており、形態上「ばとて」となっているものは、『源氏物語』で約1％にしか過ぎず、しかも「ばとて」形であっても、逆接ではなかった（注3）。しかし、『延慶本平家物語』に「已然形プラス『ばとて』」形で逆接を表すものが存している点、注目される。

［用例1］「勅定ニテ候ヘバトテ、ヒタ頭ラニテハ争（いかで）カ僉議仕候ベキ」ト申タリケレバ、（略）

（第一本　98ペ）

［用例2］昔ヨリ雨ヲ祈リ日ヲ祈ル事ハ有シカドモ、飢饉疫癘立チ所ニ祈留ル例、未承及。サレバトテ、辞申サバ、王命ヲ背クニ似タリ。

（第一本　99ペ）

［用例3］（略）只眼ニ遮ルモノトテハ尽セヌ涙計也。サレバトテカクテヤムベキニモアラズ。（第二末　463ペ）

［用例4］既ニ暁ニ成ニケレバ、二人ナガラ大覚寺ヘ行テ、「聖モ今マデオトモセズ、サレバトテ京都ニテ年ヲクラスベキニアラネバトテ、北条既ニ暁立ベキニテ候。（略）」トテ二人ノ者共袖ヲ兒ニ押当てオメキ叫（ブ）。

（第六末　490ペ）

［用例5］（略）本意ヲ遂ベシト云ケレドモ、サレバトテステ置ベキニアラネバ、（略）

（第二末　522ペ）

［用例6］土屋三郎思ケルハ、「ネ（寝）入タルヨシヲシテ、コヽヲトヲ（通）シテ先ニ人ヲヲキテ、中ニ取籠トスルヤラム。」サレバトテ可帰ニモ非ズシテ、走通ケレバ、誠寝入タリケル時ニヲトモセズ。（第二末　524ペ）

［用例1］「ニテ候フ」、［用例4］「クラスベキニアラズ」は、直前に指定表現を承けたもので逆接を表しており、その他は接続詞「さればとて」形である。

その一方で形態上「ばとて」ではあるが、平安時代と同じく順接を表すものもまた存している。

［用例7］花山院ノ左大臣ノ御台盤ノ親クヲハスレバトテ、上臈女房ニテ、廊御方ト申ケルトカヤ。（第一本　36ペ）

このように『延慶本平家物語』では「已然形プラス『ばとて』」形で逆接を表現する用法が多数を占め、史的に見た場合、「ばとて」形が順接用法から逆接用法へと移行してゆく過程の初期段階を示している、と考えられる。また、この「ばとて」形は［用例2］等のように、「さればとて」という接続詞を十二例産出しており、口語の世界では「ばとて」形が頻用されたことを物語っていると思われる。

また、「未然形プラス『ばとて』」形は、

［用例8］其時貴妃ノ宣ク、「（略）」ト恨給ケレバ、サラバトテ七日七夜、菩薩浄戒ヲ授奉ラル。

（第一末　118ペ）

［用例9］六条申ケルハ「男ハ心強キコソ憑ク候ヘ。（略）

御文ヲアソバシテ給候へ。侍従ニトラセ候ワム」ト云ケレバ、サラバトテ文ヲカキテ六条ニタビテケリ。

（第五本　276ペ）

［用例8］［用例9］の如く、平安時代にも見られた「さらばとて」形のみである。『延慶本平家物語』では、この「さらばとて」形が四例見出されるが、この「さらばとて」は「さればとて」よりも早く『源氏物語』に現れており、このことは、「とて」の引用節の動作性が≪未だ顕在化していない、或いは顕在化しつつあるもの≫から、≪既に顕在化したもの≫へ、変容しつつある姿を表している流れの中で捉えることができるように思われる。

2－2、史記抄の「とて」

逆接の「ばとて」の用例は、抄物初期の『史記抄』にも用いられている。

［用例10］秦楚ヲ合スレハトテ韓ニアタラウ用テハナイ

（史記抄　十一　3ウ）

［用例11］三老ト云ヘハトテ三人テハナイソ

（史記抄　十二　50オ）

［用例12］イカニ憎キ者ナレハトテトカヲ云カケテ殺スマシイ者ヲ誅滅スルハ至悪ナリ

（史記抄　十五　34オ）

［用例13］ナセニト云ヘハナニカ周ニ兩定王ハアラウソ　サレハトテ時代カ遠ク隔タトモ不思ソ

（史記抄　二　128ウ）

［用例10］［用例11］の「ばとて」は、後件句に否定語「ない」が存することからも明らかなように逆接用法であり、［用例12］は逆接の接続詞化した「さればとて」である。

また、『史記抄』中には未然形に承接する「ばとて」形は、『延慶本平家物語』同様、「さらばとて」しか存しない。以下、用例を示す。

［用例14］愛慕――少子チヤホトニ是非ニ御トモ申サウト云ホトニサラハトテツレラルヽソ

（史記抄　四　49オ）

［用例15］サラハトテ國中ヲ索リサカシテ諸侯ノ客ヲ一人テマリヲクヘカラスト云テサカスソ

（史記抄　四　6オ）

［用例16］サラハトテチツトコヽロムルソ

（史記抄　八　12オ）

『史記抄』においては、［用例14］［用例15］［用例16］のような「さらばとて」形は、10数例用例が存するのに対し、「さればとて」は4例のみであって、用例数から言えば「さらばとて」が優位に立つ。接続詞「さらばとて」は、「ばとて」形の大勢が『延慶本平家物語』、後述するキリシタン資料等からも、逆接へと変化していた時期に存在することになるのであるが、「ばとて」が逆接化する初期の段階では未然形を承接するものも依然として存していたことも見逃せぬよ

うに思われる。そして、未然形を承接するものは「さらばとて」に限られており、「未然形プラス『ばとて』」は「已然形プラス『ばとて』」に比して、固定化した用法として捉えることができるように思われる。

また、次のような「ばとて」の用例がある。

［用例17］堅石白馬ト云テ堅ト云ヘハトテ、石ハカリテモアラバヤ、白馬ト云ハトテ、馬ハカリテモアラバヤナントゝ辨士カテキテ云ヲ堅白異同之辨ト云ソ

（史記抄　十一　14ウ）

［用例18］且非――我一人ハカリテモナシ、樊於期モ我ヲタノウテキタモノヲ、イカニ秦カヲソロシケレハトテ、カハイケニ棄テテモアラハヤソ

（史記抄　十一　79ウ）

この［用例17］［用例18］は、逆接の「ばとて」の用例であるが、後件句に「ばや」が用いられていることが注目される。この「ばや」は文意からして明らかに否定の意であるが、この「否定の『ばや』」初出例は中世期であり、しかも口語性の強いものにしか見られない（注4）。このように「ばとて」が先行し、それに対して否定の「ばや」が用いられているということは、否定の「ばや」の語性からして「（已然形プラス）ばとて」の口語性を傍証することになると思われる。

2－3、狂言中の「ばとて」

―天正狂言本、虎明本を中心に―

狂言資料で現存最古の資料である『天正狂言本』中の「とて」は94例存しており、その上接語を纏めて示すと次のようになる。

※助動詞　30例　（なり　5例／む（ん）20例　べし　3例／ず（打消）1例　じ　1例）

※形容動詞語幹（もっとも）　4例

※形容詞　18例　（おそき8／ふかき3／忝ない1／なし2／身苦し1／心許なし1／ひだるし1／めでたし1）

※動詞　28例　※名詞　13例　※ばとて　1例

平安時代の「とて」の場合、「未然」≪動作の顕在化していないもの≫、「将然」≪動作が顕在化しつつあるもの≫を承接するものが大勢であり、「既然」≪動作が既に顕在化したもの≫は少数であった。『天正狂言本』の場合、上接語を比較してみると、「未然」「将然」が多数を占めており、相違は見受けられないと思われる。ただ、形容詞に承接する用例が多いこと、近世より逆接用法として確立してゆく指定辞

「なり」を承接する用例が存しているという点は注目される。

そのなかで、ここで問題としている「ばとて」は、

[用例19]（略）身躰曇り無ければとて玉藻の前と召されける。（99オ　324ペ）

と一例のみであり、しかも、この用例は順接用法であって、『延慶本平家物語』の[用例7]と同質のものである。このように、逆接の「ばとて」は『天正狂言本』には表れないのであるが、「ばとて」以外にも逆接の用例は皆無であり、『天正狂言本』に於いては「とて」の統一された用法を窺うことができる。

次に、『大蔵流虎明本』について。『虎明本』では「とて」は235例用いられており、その中で、「むとて」形37例と「将然」の用例も依然として存しているのであるが、また一方で、「ばとて」は10例用いられており、すべて已然形に承接したものであって、「未然形プラス『ばとて』」は存しない。以下、「（已然形プラス）ばとて」の用例を示す。

[用例20]天照太神（ママ）ヨリ三番メノヨト〳〵成レハトテ西ノ宮ノエビス三郎殿トイハヽレ（ゑひす大黒（上）書入　28ペ）

[用例21]ひることは某が事、天照大神より、三番目の弟なればとてにしの宮のゑひす三郎殿といはゝれ、氏しゆじやう、誰にかおとり給ふべき（ゑひす毘沙門（上）328ペ）

[用例22]則みやうがといふものは槃特の廟所よりおひ出たる物なればとて鈍根草と名付けたり（どんごむさう（中）75ペ）

[用例23]殺生をする石なればとて、せっしや石とは付られたり（つりきつね（下）125ペ）

[用例24]（果報者）まだりくつをぬかすか。人がいへばとて、買うて失するものか（目近籠骨（上）96ペ）

[用例25]牛の子にふまるなにわのかたつふり角あればとて身をばたのみそ（牛馬（上）125ペ）

[用例26]（主）人の用いさせらるればとて、某が子細があるといふに、きゝおらひでくらふ物か（どんごむさう（中）75ペ）

[用例27]（夫）女共がよせてきたればとて、深しい事があらうか（ひげやくら（中）274ペ）

[用例28]（金岡・夫）是はいかな事、某がゑかきの上手なればとて、下地のわるひものがなんとしてならふぞ（かなわか（中）299ペ）

[用例29]（ばくち打）みめよしめも憎ひ、人が呼べばとて、失するものか。頭からくわつり〳〵と食はふ（みめよし（下）229ペ）

[用例20]から[用例23]までの「ばとて」は順接の用例であり、承接する語は指定の助動詞「なり」である。また、[用例24]から[用例29]までの「ばとて」は逆接の用例であって、この『虎明本』の分布は『延慶本平家物語』に見られた、順接、逆接両者が表れるという現象と等しく、概して

中世後期の姿を示していると言えるであろう。

但し、逆接の「ばとて」を使用している言語主体は、「夫」「ばくち打」等、社会的属性は高くないのであって、所謂「雅語」としては直截的にすべての「ばとて」が逆接用法である、と解することはできないと思われる。しかし、社会的属性の高くない、下層の言葉として用いられていることは、日常の民衆口頭語では「ばとて」が逆接化している、或いは既に逆接化が完了した姿を反映しているものと解してよいのではないかと思われる。

また、「とて」用法中で、「ばとて」以外に逆接として用いられているものが存しており、それらは次のように「とても」と「も」を伴っている点、注目される。

[用例30] 忝くも天神の御詠歌に、牛の子、踏まるな庭のかたつふり角有とても身をな頼みそと、かやうにこそあれ、（略）（牛馬（上）124ペ）

[用例31] 只今も申ごとく内々思ひ寄りて御ざるにより、不断女にても申て御ざれば一段よからふと申た程に、今とても別義御ざるまひ（路れん（中）336ペ）

[用例32]（新発意）しかとそなたはわらふか、惣じて人の身の上には、誰とてもおかしひ事はあれども、こらゆるが作法ぢゃ（とびこゑ（中）351ペ）

[用例33] かりそめながら是とても、ちやしやうの種の縁に今、うちわの砂の草かげに、ちやちかくれ失せにけり（つうゑん（中）389ペ）

[用例34]（男二）ようこそござったれ。内々は某もそれへ談合にまいらふとぞんずる所で御ざった。私は別にこしらへた事とてもござらぬが、（略）（連歌盗人（下）24ペ）

[用例35]（かうのの何某）あまりの道理に物な申そ。しかも今年はわが親の、十三年にあたりたれば、親孝行のためといひ、理といひ、とがありとてもたくるぞ（鶏猫（下）74ペ）

以上の『大蔵流虎明狂言本』に表れた「とても」6例は、前件句に「名詞」、或いは存在詞「あり」を承け、後接する接続関係からしても、全て逆接用法として用いられている。それに対して、ここで問題としている「ばとて」も、『延慶本平家物語』『史記抄』同様、順接、逆接両用として用いられているのであり、その引用節の類似性を指摘できる。更に、「ばとて」は全て已然形承接であって、未然形に承接したものは存していないことを考え併せると、このことは≪未然形、已然形両形に承接していた「ばとて」が「已然形プラス『ばとて』」という型に集約され、その語形が逆接化して行く≫状況を呈していると考えられる。

以上のように、「とて」が逆接化する要因として、引用節の「已然形プラス『ばとて』」の慣用句化と共に、「とて」が「も」と複合した「とて・も」形も大きく影響していると思われる。特に、[用例25]の「ばとて」、[用例30]の「とても」は両用法を考える上で示唆的である。

2－4、キリシタン資料中の「ばとて」

キリシタン資料の「ばとて」に関して、まず、ロドリゲス『日本大文典』に次のような記述がある。

○現在

接続法の現在にTote（とて）、又はtotemo（とても）を添えて、Agureba tote（上ぐればとて）等を作る。

○完全過去

○すべての種類の活用に於ける過去にToiyedomo（と雖も）、ritomo（りとも）、tomama（とまま）、又はrebatote（ればとて）を添えて作る。

○第二種の助辞はTomo（とも）、Toyitomo（といふとも）、totemo（とても）、tomama（とまま）、batote（ばとて）、rebatote（ればとて）である。

（日本語及び葡萄牙語に固有な接続法　74ページ以降）

・殿の御出家召せばとて（ba tote）、それは如何様心宛もござらうず、そなたの出家は何事ぞ。

・命惜しければとて（reba tote）源氏に伝はる重宝を敵の手に渡さうか。

（許容法、又は、譲歩法　88ページ以降）

ロドリゲスは「許容（譲歩）」が「ばとて」の本来の用法であると指摘しているのであるが、「いへども」「とも」と併記されていること、また例文からしても、口語の世界では「ばとて」形、「とても」形共に逆接用法として既に確立していたと解することができる。

勿論、他のキリシタン資料にも「ばとて」の用例は存しており、『天草版伊曽保物語』には2例（「とて」21例）、『天草版平家物語』には14例（「とて」137例）見出すことができる。

［用例36］たとい鳳凰、孔雀の手を換えらるるとも我らが一族のあらう程で無下に敗軍する事はあるまじいに、いわんやこうもりづれの臆病者どもが五万十万敵に付いたればとて、戦場へ出でては一羽もえ追うまいぞ。

（天草版伊曽保物語　61－8）

［用例37］いかに腹が立てばとて、力に叶わぬ相手に向うて仇を為さうと企つる事は、土仏の水嬲りぢゃ。

（天草版伊曽保物語　86－12）

［用例36］「いわんや」という漢文訓読語が先行しており、一見すると文語的場面のようであるが、「ばとて」は明らかに逆接の意である。同様に、［用例37］も「いかに腹が立つからといって」という文意からしても「ばとて」は逆接用法となっている。

以下、『天草版平家物語』の「ばとて」の用例を示す。

［用例38］召されうに参らねばとて、命を失はるるまではあるまじい。（天草版平家物語　100　211ページ）

［用例39］（略）そのうちに、平家の祈りをした真海といふ

老僧会議の場へ進み出でて申すは：これを申せばとて、平家の方人をするとな思はせられそ

（天草版平家物語　122　255ペ）

［用例40］甲斐、信濃の源氏どもは案内知っつ、富士の腰から搦手にまはることもござらうず。かう申せばとて君を臆せさせまらしょうとて、申すではござない。

（天草版平家物語　152　315ペ）

［用例41］さてこれほど多い田どもを刈って馬に飼うたればとて、あながちに法皇のお咎めあらうずることか？兵粮がなければ、下下の者どもが辺土などで時々入り取りをしたればとて、深いとか？

（天草版平家物語　220　451ペ）

［用例42］汝に逢うては名のるまい。ただ今名のらねばとて、隠れあらうものか？首実検の時やすう知れうぞ。急いで首をとれとあったれば：熊谷思ふやうは：ただ今この人討たねばとて、源氏勝たうずる軍に負けうでもなし：討ったればとて、それにはよるまじいと思うたれば、助け奉らばやと後をかへりみるところに、（略）

（天草版平家物語　277　565ペ）

［用例43］さればいかに猛い将軍なればとて、かやうになれば心は変るならいぢゃ。

（天草版平家物語　362　735ペ）

［用例44］その時清盛大きに驚いて、さればとて出家入道まではあまりけしからぬ儀ぢゃ。

（天草版平家物語　40　91ペ）

［用例46］祇王はさればとて今さら人に対面して、遊びたはむれうずることでもなければ、文を取り入るることもなし。

（天草版平家物語　98　207ペ）

［用例46］それのみならず、歴々の者が木曽を捨つるによって、兼平が申したは：これこそもってのほかの御大事でござれ：さればとて帝王に対せられて御合戦をさせられうずるでもなし

（天草版平家物語　220　451ペ）

［用例47］新中納言見させられて使で、せんない仕業かな！あまり罪なつくらせられそ：さればとてしかるべいものでもなしと仰せらるれば、（略）

（天草版平家物語　346　703ペ）

［用例48］（略）攻め落とさなんだれば、丹後の侍従仰せられたは：さればとて身がゆゑにおのおのの命をむなしうなしまらせうずることはいたはしい

（天草版平家物語　406　823ペ）

右の用例から『天草版平家物語』に用いられた「ばとて」も接続関係からして逆接であり、引用節中の用言も動作性を有するものが存していることが分かる。

以上のように、これまでのキリシタン資料に表れた「ばとて」の用例はすべて「已然形プラス『ばとて』」形で、しかも逆接用法のみであり、『狂言台本』等に見られた順接用法は存しない。これは他の資料とは相違してはいるが、日常口

頭語においては「ばとて」が逆接化しており、逆接として用いられていた、ということを表していると考えられる。

よって、これまでの各々の資料性を勘案しても、「已然形（―れ）プラス『ばとて』」が中世後期には逆接として確立していたという事実は間違いないと思われる。また、「已然形プラス『ばとて』と併せて、「とても」形が指摘されていることも見逃せない。このことは、意味用法が内的に変容しつつ、「ばとて」と「とても」が「とて」を、順接用法から逆接用法へ、と転ぜしめたプロセスを雄弁に物語っている、といえよう。

3、「ばとて」と「ばって（ん）」

現在方言の「ばって（ん）」については、その分布状況を知る上で、『九州方言の基礎的研究』「逆接『けれども』」（注5）と『方言文法全国地図』「『寒いけれども』『だけど』『植えたのに』」（注6）があり、両者とも有益である。それを引用したものが第一図と第二図である（次ページ）。この方言分布地図によって「ばって（ん）」類は、九州方言と東北北部に分布していることから、方言周圏論的解釈によって、広く中世後期には「ばって」が分布していたことが理解できる。

この「ばって」類について、奥村三雄氏、神部宏泰氏は「ばとて（も）」からの語形変化として「ばって（ん）」類をお考えのようであり（注7）、筆者も「ばとて（も）」から「ばって（ん）」が生じたと考える。

ただ、ここで問題となるのは、現在方言の「ばって」類は「終止形」乃至は「名詞形」に承接し、「已然形（仮定形）」には承接しないということである。したがって、直接的に「ばとて」は「ばって」類と結び着かないのではないかという疑問が浮かび上がってくるのであるが、この問題について、神部宏泰氏は、次のように指摘しておられる（注8）。

「ばとて」が、一個の機能体として遊離する史的事情は、「ども」の場合に擬して理解することができよう。例えば、「良かればとて」「〜たればとて」が、「良カイバッテ」「〜タイバッテ」を経て、遊離した「バッテ」の成立に至ったと考えることは、十分に理のあることである。現に肥前佐賀西部域では、文頭の接続形式（接続詞）として、慣用的に「アイバッテン」（さればとても）が頻用されている。

神部氏の指摘は、「ばとて」から「ばって」が成立するときに問題となっていた「ばって」類の終止形接続の問題を解くものとして卓見であると思われる。氏が説かれる、

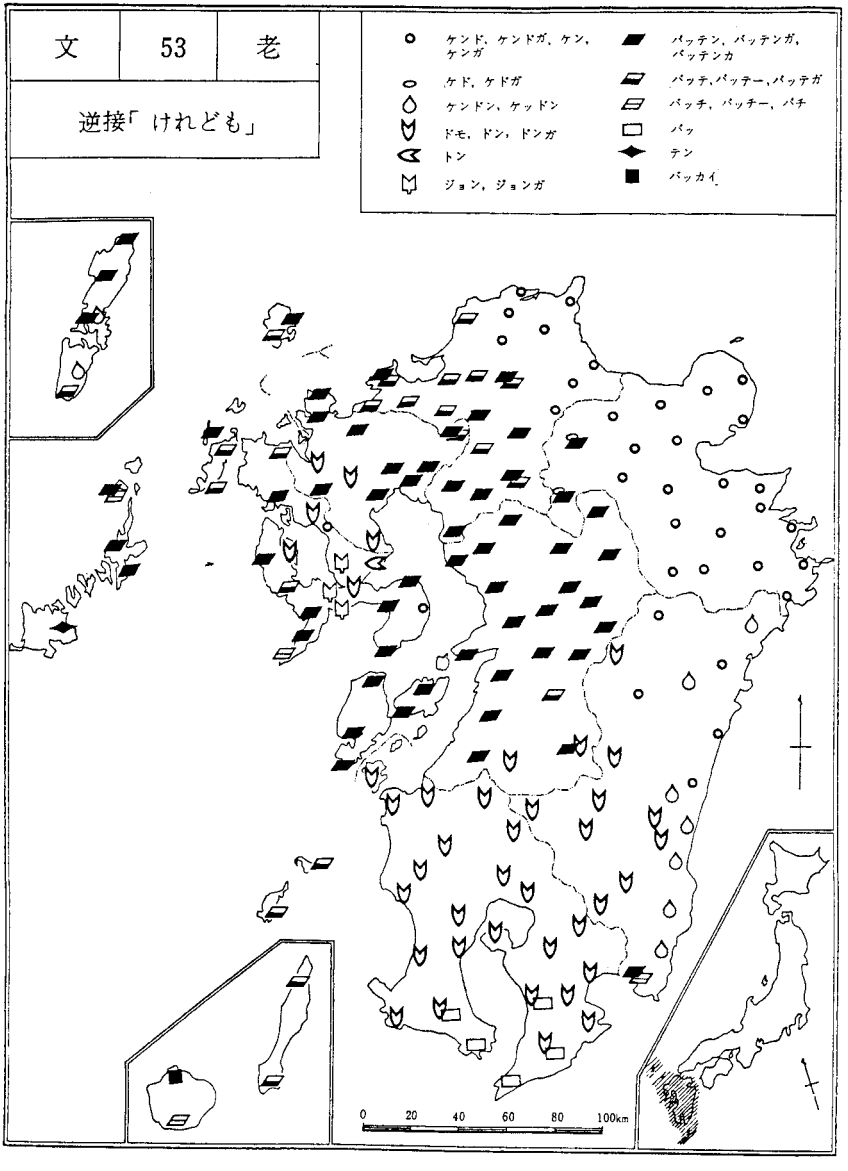
「良かればとて」→「良かいばって」→「良かばって」

というフローチャートによって、現在方言へ続く、接続上の問題点も解決できる。

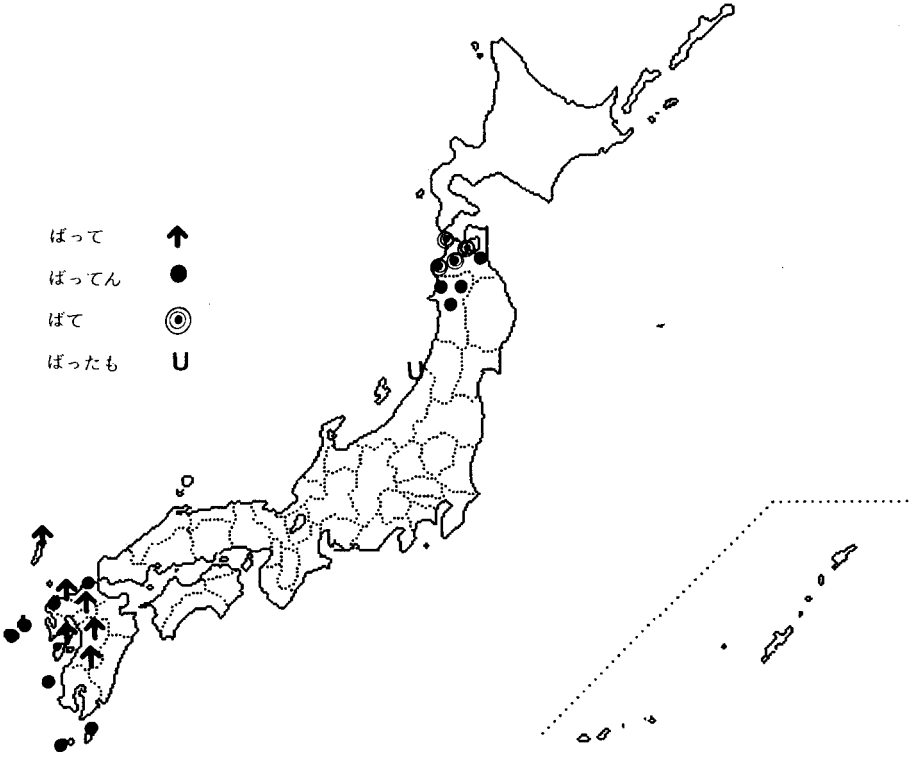
また、神部氏は、現在方言分布より、

「バッテン」類の分布において、主としてその外周に「バッテ」のきわだつ事態からすれば、あるいは「ばと

第 一 図


文
53
老
逆接「けれども」
ケンド、ケンドガ、ケン、ケンガ
ケド、ケドガ
ケンドン、ケッドン
ドモ、ドン、ドンガ
トン
ジョン、ジョンガ
バッテン、バッテンガ、バッテンカ
バッチ、バッチー、バッテガ
バッチ、バッチー、バチ
バッ
テン
バッカイ
0 20 40 60 80 100km

第　二　図
（方言文法全国地図を基に作成）



て」の方が（「ばとても」よりも）先行したかとも考えられる。　（（　）筆者注）

と指摘しておられるが（注9）、中世においては「ばとても」の用例は見られない。このことは、神部氏の指摘と正しく符合するのであって、文献を見る上でも指摘したように、中世においては「ばとても」形が先行したのではなく、「ば」と「とて」が複合した「ばとて」形が先行し、その後「ばとても（ばってん）」形が成立したと思われる。

4、おわりに

以上、「とて」が逆接として用いられるようになったプロセスとして、

- 「ばとて」形の台頭
- 引用節中の動作性の消長（動作性から状態化）
- 「とて」と「も」の複合助辞「とても」
- 現在方言「ばって」類との関係

という視点で考察した。御教授、御叱責頂ければ幸いである。

（尚、底本は『延慶本平家物語』（『延慶本平家物語本文篇』上下　北原保雄編　勉誠社　平2）、『史記抄』（『抄物資料集成』1　清文堂出版　昭46）、『天正狂言本』（『日本古典全書』朝日新聞社　昭31／『狂言古本二種』わんや書店　昭52）、『大蔵虎明本狂言集』（『大蔵虎明本狂言集の研究』上中下本文篇　北原保雄・池田廣司編　表現社　昭47）、『日本大文典』土井忠夫訳　三省堂　昭30、『天草版伊曽保物語』井上章　風間書房　昭39、『天草版平家物語』（『天草版平家物語対照本文及び総索引』　江口正弘　明治書院　昭61）である。

【注】

（注1）拙稿「助辞『とて』の成立過程・意味用法をめぐって」（一）（「別府大学紀要」第36号・平成7年1月）「同（二）」（「山口国文」第18号・平成7年3月）

（注2）此島正年氏は『国語助詞の研究』（桜楓社・昭41）（一五〇頁以降）で次のように「とて」の逆接用法を分類しておられる。

室町期頃までは「已然形プラスば」を受けるばあいが多い。江戸時代になると(1)「已然形プラスば」(2)完了の「た」(3)用言を直接受けるもの（「とても」を含む）になる。

（注3）注1に同じ。

（注4）否定の「ばや」については、

福島邦道氏「否定の『ばや』について」（「未定稿」3・昭31）、「否定の『ばや』再考（「実践国文学」16・昭54）（以上は『語史と方言』（笠間　書院・昭63）に所収）、山内洋一郎氏「否定の助詞『ばや』について」（『連歌とその周辺』中世文芸叢書　別巻Ⅰ・昭42）『中世語論

考』（清文堂出版・平元）、湯沢幸吉郎氏『室町時代の言語研究』（昭4）、小林好日氏「二つのばや」（『安藤教授還暦祝賀記念論文集』（昭15）後『国語学の諸問題』（岩波書店・昭16）所収）、出雲朝子氏「国語学」書評170（平4）があり、その語性、成立の更なる考察については別稿を用意したく思う。また、否定の「ばや」の用例に、

何とてか蓼湯のからくなかるらん、といふに、うめ水とてもすくもあらばや（菟玖波集十九）

とあり、中世後期には「とても」が逆接用法として先行し、その後、否定の「ばや」を伴ったのではないかと思われる。

（注5）『九州方言の基礎的研究　改訂版』（九州方言学会　風間書房　初版　昭44　改訂版　平成3）

（注6）『方言文法全国地図1』（国立国語研究所編　大蔵省印刷局　平成元）

（注7）「方言と古語」『講座日本語の語彙』8　明治書院・昭58）／『九州方言の表現論的研究』（和泉書院・平成4年）

（注8）注7『九州方言の表現論的研究』（和泉書院・平成4年）に同じ。

（注9）注8に同じ。

（本学文学部国文学科専任講師）